

## 酒田商業高校跡地活用基本構想(案)への意見

### ◆ はじめに

酒商跡地の活用は、酒商跡地だけでなく消防本部跡地をも含め、観光スポットである山居倉庫を念頭に置いた山居倉庫周辺エリアと位置づけ、その中で酒商跡地の活用を考えることは至当な措置である。

酒田市は、人口減少を始めとして相対的に都市規模・都市活力が縮小していくことが予想される。当然、労働人口も減少し、商工業・農漁業等の産業に対する影響も大きい。この中で重要な産業の一つと目されるのが「観光」である。

酒田市はソフト・ハード両面での観光資源に恵まれている。「鳥海山・飛島ジオパーク」の日本ジオパークへの加盟(平成28年9月)、日本遺産「北前船寄港地船主集落」の認定(平成29年4月)、外国クルーズ船の寄港また山居倉庫の国指定史跡と酒田市が取得する構想など、旧来から酒田市が有してきた観光資源に新しく付加価値を加えて行く動きとして捉えることが出来る。

さて、観光を将来に向かってどのように充実していくかが課題である。その施策の一つとして歴史ミュージアム・歴史資料館の整備建設を提案する。

### 1 基本的な考え

跡地活用基本構想(案)で示されている賑わいの拠点をつくる商業施設と同時に歴史ミュージアム・歴史資料館構想との二本立てを事業スキームとして、将来的な基本構想を立案して欲しい。現在、酒商跡地に公共施設を造ることが難しいとすれば、基本構想(案)に示された賑わい創出を目論む商業施設の設置に加えて、跡地の一部を将来歴史ミュージアム・歴史資料館建設の予定地として方向性を盛り込んで欲しい。実現まで緑地帯として整備しておくことも出来る。

例えば、米沢市では観光拠点の上杉神社前に観光博物館として上杉博物館「伝国の杜」があり、道路を挟んで商業施設「上杉城史苑」がある。観光スポットと歴史ミュージアムと商業施設とが近接しており、相乗効果によって平日でも大いに賑わっている。参考になると思う。

先に実施した「酒田商業高校跡地活用に関するアンケート」では歴史・文化での活用の方向性の比率は必ずしも高くないが885のうち140とそれなりの支持がある。「旧酒田商業高校跡地活用に向けたサウンディング型市場調査」での参加は4事業者と少ないが、D者のプランCは酒田市の歴史を紹介する屋内型資料館の整備事業を提案している。

将来の酒田市を見据えて、何が必要か高所大局に立って判断されることを、切に願います。

(1) 歴史ミュージアム・歴史資料館が必要である。

酒田市には、現在、市民会館「希望ホール」、市立美術館・本間美術館・土門記念館がある。不足しているのは、歴史ミュージアム・歴史資料館である。市立資料館は手狭であり、酒田の歴史を系統的に常設展示する施設が必要である。

(2) これからの観光客は歴史的な建造物や自然景観を見物するだけでなく、その町の歴史、文化に興味関心を持ち、気風を感じ取り親しみ楽しむ、よりソフト面も重視される。酒田の歴史、文化、気風を知ることのできる内容施設を造る。

酒田市は、都市規模が縮小しても特色ある繁栄の歴史、文化、気風を大事にし活かして、魅力的な個性的な町となることが期待される。その可能性は十分ある。

(3) 市民・特に小中高児童生徒の学習の場と観光に役だてる。

市民、特に小中高児童生徒が、自分の住む町の成り立ち、歴史を知り、郷土愛を育み、酒田の町に誇りを持つことが大切である。地域を元気にする気概はそこから生まれる。そのことに応える大事な施設が、歴史ミュージアム・歴史資料館である。

(4) 例えば、当時の街・湊の様子などをジオラマで再現する。最新の映像技術を駆使した説明方法を研究する。床に北前船航路地図を嵌め込み一望できるようにする。

歴史ミュージアム・歴史資料館は、単に建物を造るだけでなく、内容をどのようにするかと言うことに智慧と時間を要する。拙速を避け十分に検討・研究を重ねて完成することが望まれる。専門科を集めて、じっくりとソフト面の計画を立てて、それにあった施設を造る。

(5) 何故、酒商跡地が良いのか。

観光スポットの山居倉庫、繁栄した湊、酒田町奉行所跡、本間家本邸、鍛屋、亀ヶ崎城跡など酒田でも古い街のエリアの中心にある土地であり、江戸期以前から酒田湊の繁栄を支えた米蔵の跡である。

酒田の発展の基礎は湊であり、最上川舟運での紅花・あおそなどもあるが、基本的な取扱物資は米である。17世紀初頭、上蔵・下蔵・山形蔵などの米倉庫が、湊河岸に置かれた。寛文12年(1672)、河村瑞賢が西回り航路を開発整備し、酒田を起点とする航路が盛んになった。鍛屋が元禄元年(1688)、日本永代蔵で北國一の米問屋として紹介されている。酒田の有力商人が各藩の蔵宿として年貢米を預かり保管し、米価などを見計らって販売したり、他国に積み出しをした。幾つもあった米蔵の代表的な上蔵のあったところが、酒商の跡地の校舎が建っている所である。

江戸時代、上蔵は庄内藩の所有であったが、明治3年県有になった。明治10年、租税が金納となり、民間に払い下げとなった。一時は三菱会社や日本郵船(株)の所有でもあったが、明治19年、本間家が日本郵船(株)から買い受けた。時代がくだって、上蔵を主体とした倉庫は、酒商跡地の向かいの旧片町の民家や現在の前田製管駐車場なども含め、広大な一帯が新井田倉とか新井田倉庫と呼ばれた。明治27年、庄内大地震で、新井田倉庫の大部分が焼け落ちた。

大正6年12月、町立酒田商業学校の新校舎建設にあたり、本間家が更地になっていた古来からの上蔵の跡地を校舎敷地とし、建設費の半額1万円とを酒田町に寄贈した。これによって始めて商業学校の新校舎が建設された。その後現在のグラウンドは、学校の同窓会・

後援会が民有地を買収し、この時も本間所有の土地が寄贈され、グラウンドが整備され昭和19年酒田市に寄贈された。酒商跡地は、謂わば公益の土地である。

酒田繁栄の基礎を築いた米蔵の跡地であることとその後の歴史を含めて、酒商跡地に酒田の歴史・文化を伝える歴史資料館が設立されれば、それがまた観光にも役立っていくことになれば、酒田の新しい歴史・文化の発祥地にもなっていくのではないかと思う。

## 2 その他

- (1) 歴史ミュージアム・歴史資料館構想と商業施設の二本立てを事業とすることで、駐車場が不足するようであれば、消防本部跡地も駐車場とする。
- (2) 樹木緑地の整備  
跡地にある市の保存樹だけでなくケヤキの木を極力残す。酒田の木・ケヤキの杜を造る。
- (3) 新井田川河畔の活用
  - ① 山居倉庫対岸の港区域になっていて漁船の係留地になっている岸壁(新内橋から山居橋間)を、船の係留地とせず、安全対策を講じてイベント広場等にする。
  - ② 新井田橋から新内橋間の右岸河川敷。道路によってへだてられているが、跡地と一体化した活用を考える。

## ◆ おわりに

酒田は、歴史的、文化的、また自然環境によって、独特の町づくりがなされてきた。現在はまた作り上げていく過程にある。

観光について言えば、町の方から観光客・旅行者・旅人に語りかけるものがなければならない。建造物、自然などが、無言のうちに語りかけいているが、歴史、文化、人情・気風が醸し出す町の雰囲気も大切である。このことで大切なのは、市民、特に小中高生が町の歴史と文化・気風を学び、郷土に誇りを持ち、郷土愛を持ち、気概を持った市民となることである。歴史・文化の学びの施設が欲しい。

将来は、山居倉庫周辺一帯を、公園のように美しくきれいな環境に造り上げ、観光客をもてなしたいものである。